

世界の著名な特許にみる ————— 第5回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

特許王エジソン その4 映画発明事業を巡る特許訴訟と反トラスト法



科学&知財クリエイター・弁理士（雅号）
大樹 七海

1. はじめに

今回は、エジソンの40代以降（1887年）の発明事業についてみていきます。エジソン三大発明の最後の一つ、「映画事業」がメインです。エジソンは42才（1889年）で、映画の萌芽となるキネトスコープの実験をスタートさせ、44歳で映画関連の特許を出願します。映画の発明をめぐる「最初の発明は誰か？」は常に論争の種です。技術的な系譜の上に、様々な人たちの各々の興味・関心によって、発明と改良が加えられていきました。次に、その世紀の発明を、「誰が事業化につなげて、最初に成功したのか？」ということについてはエジソンといえるでしょう。エジソンがどのように発明に着手し、そして、その発明をどのように事業化し、大成功に繋げ、それにもかかわらず、またしても最後には、なぜその事業から退場（1918年に映画事業から撤退）せざる負えなくなったのか。

実は、映画の発明に関しては、エジソンが生涯で唯一、社内の発明家として重きを置いた忠義な部下ディクソンに拠る所が殆どで

す。残念ながらディクソンとは袂を分かつので、エジソンは初めて技術導入（外の発明家から特許を購入）に踏み切ることもしました。

今回は、エジソンのビジネス手腕の面が色濃い発明事業回です。エンターテインメントの知財、国境を超える海賊行為、特許訴訟とパテントプール、反トラスト法による独占禁止、映画産業の萌芽期に生まれた、知財ビジネス手法の実験ともいべきリアルな現場を覗いていきましょう。

2. 前回までのふりかえりと続き

前回、エジソンは30歳で偶然にも蓄音機を発明したことで、それから逆に社会的課題・ニーズを掘り起こし、製品として創り上げ、世に送り出し、大成功を納めます。しかし40代に入ると、娯楽向けに展開していったベルリナーの蓄音機に苦戦を強いられました。それまで事務利用に目を向けていたエジソンは、蓄音機の経験から、エンターテインメント利用に目を向け始めます。そして、愛する蓄音機を写真技術の方と組み合わせ、総合的

な視覚聴覚の録音再生機器を作り、それをエンターテインメント市場に送り出せないだろうか（エジソンは、このあたりを当時の特許明細書風に、あえてわかりづらく、もったいぶって話すので、裁判官の心象が悪いのですが）という発明家としての夢が生まれ始めます。エジソンは写真にも興味を持っていました。付言すれば、当時の先端科学のほぼ全てに興味があり、例えばX線にも手を出しています。しかし身体に悪いと知り中止しました。今風に言えば理系オタクと言った方が、ピンとくるかもしれない人物です。実は健康オタクでもあり、それはまた後の回にお話しを入れたいと思います。本人曰く、不眠不休生活をしているのに長寿ですからね。脱線しましたが、そういうわけで、写真にも興味があったエジソンは、完成したばかりのウエストオレンジ研究所に現像用の暗室も設けていました。このウエストオレンジ研究所へ、後述する話題の写真家マイブリッジが訪れます。エジソンは映画にビジネスの勝機を見出しました。実際、同時期に手掛けた、「エジソン最大の愚行」（次回に紹介予定、エジソンの真骨頂が見られる発明事業です）と呼ばれる鉱山開発事業につき込んだ開発資金の失敗を埋め合わせるほどに、映画事業の利益がエジソンを救います。しかし、さすがにエジソンの夢見た総合映像装置を実現させるには、時代はまだ早すぎて、映画は蓄音機（音声）とは切り離し、まずは視覚上の問題解決、写真の連続映写技術やフィルム製造技術、スクリーン投影技術確立等の進展に年月を取られました。映画発明へのエジソンの寄与分は他の発明事業分野に比べて実はあまりありません。なぜなら、エジソンは鉱山開発事業の発明の方に毎日汗と泥だらけになって、のめり込んでおり、また蓄音機の改良発明の方も続けていたので、映画の周辺技術開発からの発明を手掛けることに労力を割けなかったからです。しかし、エジソンは今の時代にも残る一つの大きな足跡を残していきました。それは映画のフィルムの規格です。

さて、お待たせしました。エジソンが、また扉を開いていった新しい科学技術産業、写真から活動写真、そして映画の時代へ。まずはエジソン前史の映画科学技術史から始めましょう。

3. 映画に至るまでの科学技術史

3.1 写真技術の進展

(1) 画家・発明家ダゲール（1789-1851）

ダゲール（Louis Jacques Mandé Daguerre）は史上初めて実用的な写真技術を完成した発明家です。彼の前に、1826年に発明家ニエプスが、カメラ・オブスキュラ（ピンホールカメラのこと。ラテン語で“暗い部屋”という意味）の画像を固定しようと試み、ヘリオグラフィ技術（写真エッチング手法。ヘリオグラフィとは“太陽で描く”の意味）によって人類最初の写真を残しています。しかし、露光時間に一日（8～20時間）ほどかかったので、肖像写真としてはまだ使えませんでした。ダゲールはニエプスと共同研究を開始、途中ニエプスが死去し、その後も単独で研究を続け、露光時間が最終的に2分程度となる実用的な写真撮影法「ダゲレオタイプ」（銀版写真技法。銀メッキした銅板を感光材料として使う方法）を完成しました。ダゲールは、当時高名な科学者アラゴに頼み、1839年にフランス学士院で発表し、推薦を頼まれたアラゴがフランス政府に推挙しました。フランス政府はダゲレオタイプに特許を与える代わりに、ダゲールとニエプスの親族に終身年金を支払う形で報いて、パブリックドメインに置きました。そのため、ダゲレオタイプは19世紀半ばに世界中に普及しました。